

TOPICS

2006

第47回 全附属高等学校教育研究大会報告

附属駒場中・高等学校 大野 新

10月20日(木)・21日(金)の両日、全国の附属高校の関係者等約180名が附属駒場高校に集まりました。会期の中心は5つの分科会(地歴・公民、英語、新課程、生活指導、附属のあり方)で、その後シンポジウムを行ないました。各分科会では、各附属学校の特色ある実践が紹介されました。とくに「附属のあり方」分科会では現在の附属学校を取り巻くきびしい状況の中で、さまざまなプロジェクトに取り組み、存在意義を模索する各学校の取り組みが紹介されました。また各分科会とも年に一度の場を利用してさまざまな情報交換が行なわれました。シンポジウムは「法人化2年、附属学校のいま、これから」と題し、浦野東洋一氏(帝京大学文学部教授・元東京大学附属中等教育学校校長)と磯田文雄氏(筑波大学副学長)にシンポジストをお願いしました。進行は前本校副校長の井上正允氏(佐賀大学文化教育学部教授)です。附属学校が現在おかれている状況をさまざまな角度から分析していただき、これからの附属学校のあり方について提言していただきました。とくに磯田副学長からは学校財政に関する発言をいただき、あらためて附属の存在意義が問われていることを再確認しました。来年は奈良で開催されます。



《編集後記》

2006年ポローニア第5号“教育の最前線に立つ”はいかがでしたでしょうか。巻頭の「新春鼎談」では、多様性豊かな筑波大学の附属学校でしか実現できないような、様々な可能性が語られました。しかしその一方で、大学および附属学校が多くの困難に直面しているのも現実です。“教育の最前線”を目指し続けることは、実は“最終防衛線”を堅守することと重なり合っている気がします。附属学校教育局のあるこの大塚の地から大学が移転し、大学名から「教育」が消えてから30数年の間に、私たちの社会は大きく変化し、これからも激動の時代が予想されます。このような中で、全国的に教職大学院が計画されるなど「教育」の重要性が再認識されるのはもっともなことです。社会の変化に対応しうる人材を育成する教育現場において、教育者が“先駆者・開拓者”であり続けようとする姿勢は、筑波大学の原点である東京高等師範学校から連綿と受け継がれているに違いありません。「教育」とは筑波大学および附属学校にとって“譲れないもの”であり、かつ“パイオニア精神”を持ち続けることの重要性を改めて感じています。(下山晃司)

発行日……平成18(2006)年1月15日
 発行者……附属学校教育局長 谷川彰英
 発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
 ポローニア編集委員会
 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800
 編集委員長……篠原吉徳
 編集委員……千田捷熙・生田 茂・飯田範子・
 下山晃司・大村覚男
 デザイン……スピーチ・バルーン
 印刷……広研印刷

教育の最前線に立つ



筑波大学附属学校教育局
<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/>

vol.5